

Σ Y N (ボランティア人間科学紀要) 第5号 (2004年) 別冊

S y n (The Bulletin of Volunteer Studies) Vol.5(2004)

ユニバーサルデザインと
ノーマライゼーションに関する一考察
～日本社会における役割と意味～

横田 恭子

A Study about Universal Design and Normalization:
Especially their Roles and Meaning in Japanese Society

Kyoko YOKOTA

大阪大学大学院人間科学研究科
ボランティア人間科学講座
Research Center for Civil Society
Graduate School of Human Sciences
OSAKA UNIVERSITY
2004年11月

ユニバーサルデザインとノーマライゼーションに関する一考察 ～日本社会における役割と意味～

横田恭子

(ソーシャルサービス論)

要約

「ユニバーサルデザイン」と「ノーマライゼーション」というカタカナ語で表記される概念がある。両者とも現在の日本社会で様々な場面に登場する社会変革の思想である。

本研究の目的は、この2つの概念の日本社会における使われ方や広がり方を検証し、その社会的意味や役割、社会的発展のプロセスなどについて考察することである。

研究方法は、まず、文献やインターネットを利用して、これらの概念が日本に伝えられた経緯を整理した。具体的には、新聞や一般に普及している書籍や辞典などを利用して、ユニバーサルデザインとノーマライゼーションの日本社会における広がり方、使われ方を調査・検証した（文献調査）。

次に、文献調査では十分な検証ができなかった点や、より詳細に検証する必要があると思われる点を整理して、実際にこの概念と関わりながら各分野で活躍する人々に対し、インタビュー及び質問紙調査を行って、その結果を分析した。

そして、これらの調査結果を合わせて、ユニバーサルデザインとノーマライゼーションの日本社会における解釈、共通点、特徴、相違点、社会的役割、課題、発展のプロセスなどに関する考察を行った。

この研究を通じて、ユニバーサルデザインとノーマライゼーションには共通点と相違点があることがわかった。

両者とも、誰もがよりよく生きる社会をめざす社会変革の思想であり、その基本は、人間を中心にした考え方である。

しかし、それらの発祥や背景は異なっている。ノーマライゼーションは強い人権思想と民主主義思想を基に北欧の知的障害の分野から発祥した概念であり、ユニバーサルデザインは公民権運動や機会平等の思想をもとに北米の建築・工業デザインの分野から発祥した概念である。

日本社会においても、福祉分野に軸を置きながら広まっているノーマライゼーション、経済分野と密接に関わりながら広がっているユニバーサルデザイン、という相違があり、人々の受け止め方や印象も異なっている。

2つの概念の社会的発展プロセスを検証すると、ユニバーサルデザインは、方法論・実践論的な要素が強く、理論（概念化）と平行して実践が進められており、他方のノーマライゼーションは現在は、概念化の段階が完了しつつあり、実践の段階に入ってきていることなどがわかった。

ユニバーサルデザインもノーマライゼーションも、少子高齢化、国際化、多様化した現代の日本社会における重要な概念であり、すべての人が幸せに暮らす社会を実現するためのキーである。

キーワード：ユニバーサルデザイン、ノーマライゼーション、福祉、経済、社会変革

1 はじめに

1-1 問題意識・先行研究

ノーマライゼーションとユニバーサルデザインは、現代の日本社会における重要な思想であるが、両者ともカタカナで表記される輸入された概念である。

これらの概念に関する先行研究や文献を調べると、それぞれの発祥・発展した北欧諸国における定義や事例が研究・紹介され、日本における実践方法などが研究・模索されている。

しかし、その日本社会における役割や意味などについて検証されているものや、二つの概念を同時に研究・検証する先行研究は存在しなかった（ただし、本研究に着手した2002年4月現在で調べられる範囲において）。

私は、学生や社会人の立場から、これらの概念と間接的・直接的に関わってきた中で、この2つの概念について考えさせられ、悩まされてきた。その経験や疑問を通じて、これらの概念の日本社会における在り様を、あらためて整理・検討してみたいと思うに至り、本研究に着手した。

1-2 目的と方法

本研究は、ユニバーサルデザインとノーマライゼーションが、日本社会でどのように浸透し広がっているかを例証し、2つの概念の意義、共通点、相違点を検証し、両者が日本社会においてどのような意味と役割と意味を持っているかを考察することを目的とする。

研究方法として、まず、文献（既存資料）調査により、日本社会におけるユニバーサルデザインとノーマライゼーションの意味や広がり方を整理し、共通点と相違点を明らかにする。次に、これらの概念を広めるのに大きな役割を担ってきた人々に対する質問紙とインタビューによる調査を行って、文献調査の結果をより詳細に検証する。そして、それらを合わせて日本社会におけるユニバーサルデザインとノーマライゼーションについて考察する。

なお、2つの概念と関連して使われることが多いバリアフリーについては、2つの概念の日本社会における浸透を調べる過程の中で、比較のために取り上げるが、本論文の主題とはしない。

また、本論文は、「ユニバーサルデザインとは何か」「ノーマライゼーションとは何か」といった形で、その概念の意味や主旨や実現の手法などを検証したり、その概念について紹介することを目的としていない。したがって、この概念に関する基本的な定義や意味や原則などの説明については、ごく簡単な紹介程度とする。

1-3 論文の構成と標記方法

本論文は、1に本研究の目的と問題意識等を示し、2で日本社会における2つの概念の定義を整理し、3で日本社会における2つの概念の広がりを検証し、4にインタビュー調査の結果を記し、5にまとめとした。

また、本文中では「ユニバーサルデザイン」と「ノーマライゼーション」と表記した。両者とも外来語であり、必ずしも日本国内での表記が統一されているわけではないが、現時点では、この表記方法が、新聞、雑誌、文献などで最も多く採用されているため、これを用いた。

他の表記としては、ユニバーサルデザインについては、「ユニバーサル・デザイン」「ユニヴァーサル・デザイン」、ノーマライゼーションについては、「ノーマライゼーション」「ノーマライゼーリング」などがあるが、本論文では、それらも含めて、ユニバーサルデザイン、ノーマライゼーションとした。（それぞれ、紙面の都合でUD、NZと省略する場合もある）

2 日本社会における定義

2-1 はじまり

(1) ユニバーサルデザイン (Universal Design)

ユニバーサルデザインは、1980年代前半にアメリカの工業デザイナーであり建築家でもあったロン・メイスらが使い始め、活字として著されたのは1985年の雑誌 *Designers West* が最初である(川内2001:15)。

また、同時期に(1970年代後半から1980年代前半)、ヨーロッパでは、デザインフォーオール *Design for All* という言葉が使われはじめた。

その後、1995年にロン・メイスらが7原則⁽¹⁾を発表し、1998年にアメリカで第1回ユニバーサルデザイン国際会議 (An International Conference on Universal Design) が開かれて各国に広まった。

(2) ノーマライゼーション (Normalization)

ノーマライゼーションは、1959年から1960年代の初めにデンマークやスウェーデンで知的障害者福祉の分野から発祥した。

デンマーク社会省の行政官であったバンク・ミケルセン (N. E. Bank-Mikkelsen) によって、1959年法(「知的障害者福祉法」)の前文にその理念が取り入れられ、その後、1996年にはスウェーデンのニイリエ (Bengt Nirje) が8つの原理⁽²⁾を提唱し、1972年にはアメリカのヴォルフフェンスベルガー (Wolf Wolfensberger) が体系的理論書を現わすなど、欧米の研究者・実践家らによって深められながら各国に広まった(中園1996、大熊2002、河東田2003)。

特に1981年の国際障害者年が契機となって世界に広まった。

2-2 解釈 (定義)

現在の日本社会において、どのような概念として定義されているのか、既存文献を整理した。

(1) ノーマライゼーション

ノーマライゼーションについては、日本に伝えられて既に20年以上が経過しており、ユニバーサルデザインに比較して解釈のばらつきが少ない。

「ノーマル」は、「普通の生活」「当たり前前の生活」などと解釈される。このことについては誤解も多いが、決して対象者を「普通の状態にする」ことを意味するものではない。また、具体的な対象として「知的障害者の生活」を掲げた北欧の定義に対し、日本では、早い時期から「障害者」全体や「高齢者」や「すべての人」に対象を拡げてとらえている傾向がある。

ここで、対象者を最大限に広げると、「あらゆる少数派を尊重し、すべての人が、普通の生活を送ることができる社会を目指す思想」となる。

(2) ユニバーサルデザイン

ユニバーサルデザインの起源は、ロン・メイスによる “The design of products and environments to be usable by all people, to the greatest extent possible, without the need for adaptation or specialized design.”⁽³⁾ (特別な仕様を加えたり変更したりしなくても、すべての人にとって、できる限り利用可能であるように、製品、建物、環境をデザインすること) にある。

現在は、ロン・メイスが広めてから20年が経過し、ヨーロッパの *Design for All* やアジアの文化と交わりながら普及し拡大する中で、様々に解釈されている。根底にある考え方は同じであるが、主に解釈が分かれる点は主に次の2つである。

1つ目は「すべての人」の解釈として、障害者や高齢者を主な対象とするか、性別や言語や宗教など

の違いまでを含めたすべての人を考えるか、という点であるが、これは後者の解釈が主流であると思われる。

2つ目は「デザイン」を、商品や建物や都市デザインという、いわばハードのデザインとしてとらえるか、社会や人や制度などのデザイン（企画・構想・設計）とするか、という点である。

それぞれ広い側の解釈をすると、ユニバーサルデザインは「年齢、障害、性別、言語、文化、宗教などのあらゆる差異に関わりなく、すべての人が共に生きるための社会を目指す指導」である。

2-3 誤解の存在

ユニバーサルデザインにもノーマライゼーションも、日本語でそのまま理解できる概念ではないことや思想や哲学を含む概念であることなどから、誤った解釈も多く存在する（関根 2002、大熊 2002、河東田 2003）。そこで、両概念への誤解を整理すると、次のような共通の誤解があることがわかる。

- ①「ユニバーサル」、「ノーマル」という語そのものへの誤解
- ②物事を平板に一律にする、という誤解
- ③例外を認めない、少数派の切捨て、という誤解

3 日本社会における広がり

3-1 概要

(1) ノーマライゼーション

日本で、ノーマライゼーションという語が文献等に初めてみられたのは、日本知的障害者福祉協会（旧：日本精神薄弱者愛護協会）の機関誌 1974 年の『愛護』の 1974 年 2 月号の特集「ノーマライゼーション思想をめぐって」というという知的障害者親の会の誌上座談会からだろうといわれている（花村 1994 他）。次いで、1976 年『教育と医学』（慶応大学出版会）の特集や、中園康夫によるバンクーメケルセンなどの研究が行われる（中園 1978）。

1981 年の国際障害者年には、新聞記事や『厚生白書』『現代用語の基礎知識』に初掲載され、1990 年には『建設白書』に登場する。

これを表題にした和書は、1982 年にヴォルフエンズベルガーの著書を中園康夫・清水貞夫が翻訳したのが最初で（中園・清水 1982）、2003 年現在までに計 84 冊出版されている（国立国会図書館 DB 調べ）。2003 年現在、広辞苑や国語辞典には掲載されていないが、『社会福祉用語事典（ミネルヴァ書房）』『教育学用語辞典（ミネルヴァ書房）』などの専門用語辞典には掲載されている。

これらから、ノーマライゼーションは、1970 年代中ごろから主に社会福祉、医療、教育の分野で「ノーマライゼーション」、1980 年代には「ノーマリセーリング」等と表記され、北欧の考え方として紹介され、1981 年の国際障害者年を契機に急速に広まっていったことがわかる。

(2) ユニバーサルデザイン

ユニバーサルデザインが、日本で最初に活字として使われたのは、調べられる範囲においては、1990 年にリハビリテーション協会発行の『障害者の福祉』10 月号の「アメリカ バリアフリーデザインの流れ」という記事（川内美彦）が最初で、次いで 1995 年に日本建築家協会発行『建築と社会』7 月号の特集「ユニバーサルデザインとは」、次いで同年 11 月 21 日付の日経新聞に工業デザイン関連の記事がある。

翌年（1996）からは、表題にユニバーサルデザインが使われた本も出版されるようになり、現在では計 68 冊が国立国会図書館に所蔵されている。2003 年現在、広辞苑や国語辞典には掲載されていないが、『社会福祉用語事典（ミネルヴァ書房）』『経済新語辞典（日経新聞社）』『デジタル用語辞典（日経新聞

社』などの専門用語辞典には掲載されており、『現代用語の基礎知識（自由国民社）』には1998年から見出し語として掲載されている（詳しくは3-3参照）。2000年には『厚生白書』、2001年には『運輸白書』、2002年には『国土交通白書』に掲載された。

これらの活字に現れるユニバーサルデザインを見ると、日本社会において、ユニバーサルデザインは、アメリカ同様に、建築や工業デザインの分野から広められ、その後、多くの分野に広がっていったことがわかる。

3-2 新聞記事数に見る広がり

ユニバーサルデザイン、ノーマライゼーション（及びバリアフリー）が、新聞記事（朝日新聞・日経新聞）として登場した記事数を年代毎に調べた（図1）。

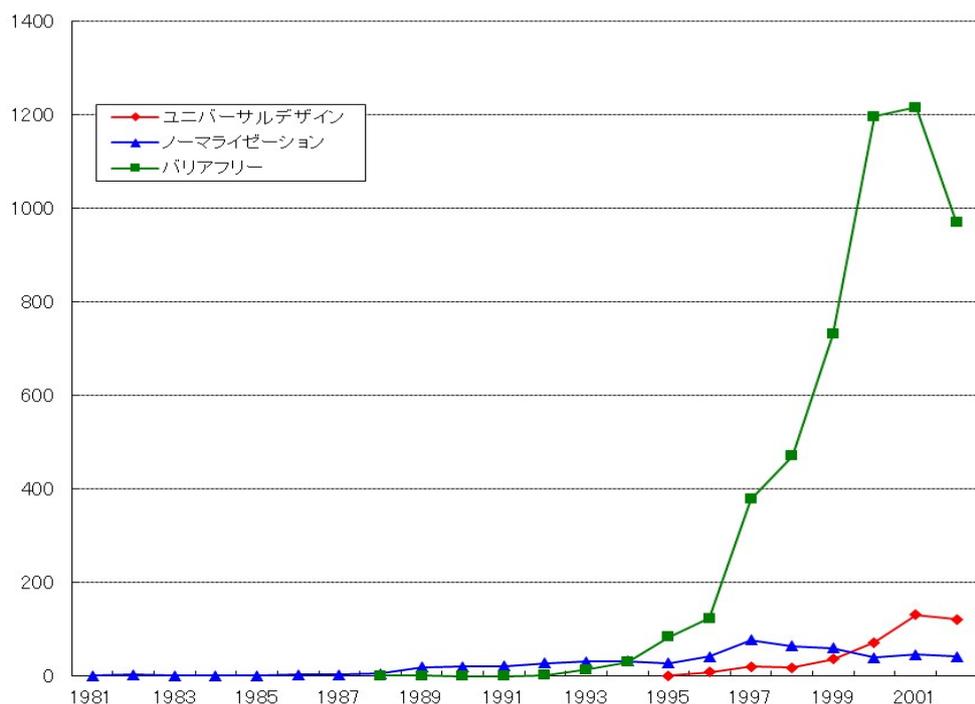


図1 新聞記事数(朝日新聞+日経新聞)

年平均記事数では、ユニバーサルデザインがノーマライゼーションを上回る。特徴的なのは、朝日・日経両社とも、1999年を境に2つの概念の掲載件数が入れ替わることである。

また、朝日新聞では、ノーマライゼーションの記事総数が、ユニバーサルデザインのそれを上回っているが日経新聞では、登場して7年足らずのユニバーサルデザインが、22年前から使われているノーマライゼーションの記事総数を上回る。これは、ユニバーサルデザインが経済分野と密接に結びついた概念であることも影響していると考えられる。

3-3 新聞掲載分野に見る広がり

日本において、どの分野に広がっているのかを検証するため、掲載された新聞記事を分野別に整理し、考察した。具体的には、まず、1985年から2002年までの朝日新聞（本紙・朝刊）にノーマライゼーションとユニバーサルデザインが登場した記事の出稿元を調べ、その割合を調べたり（図2、3）、社説の記事内容を分析した。

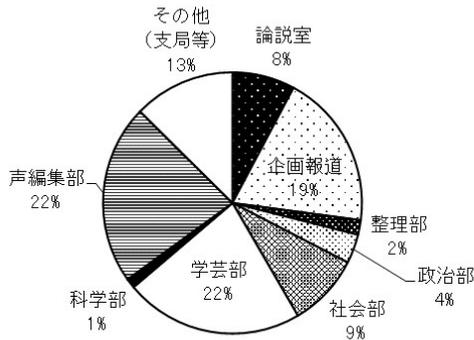


図2 記事の出稿元(ノーマライゼーション)
1985～2003(19年間) 朝日新聞

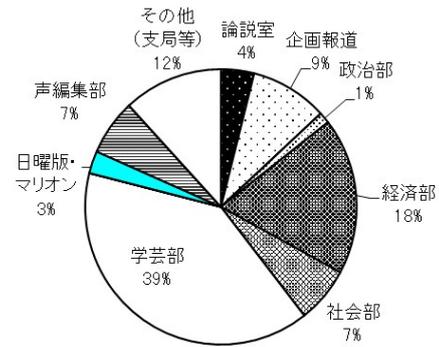


図3 記事の出稿元(ユニバーサルデザイン)
1996～2003(8年間) 朝日新聞

これらの結果から、ノーマライゼーションは、19年間に、政治や科学など様々な分野に登場しているが、経済面には登場していないことがわかった。

また、ノーマライゼーションとユニバーサルデザインの社説は両者とも、その対象が、徐々に高齢者や障害者から、子供、すべての人へと広がってきていることがわかった。

3-4 学界での広がり

学会での広がりを検証するため、ノーマライゼーション、ユニバーサルデザイン（及びバリアフリー）をキーワードとする雑誌論文記事件数を国立国会図書館のデータベースで年代別に調べた（図4）。

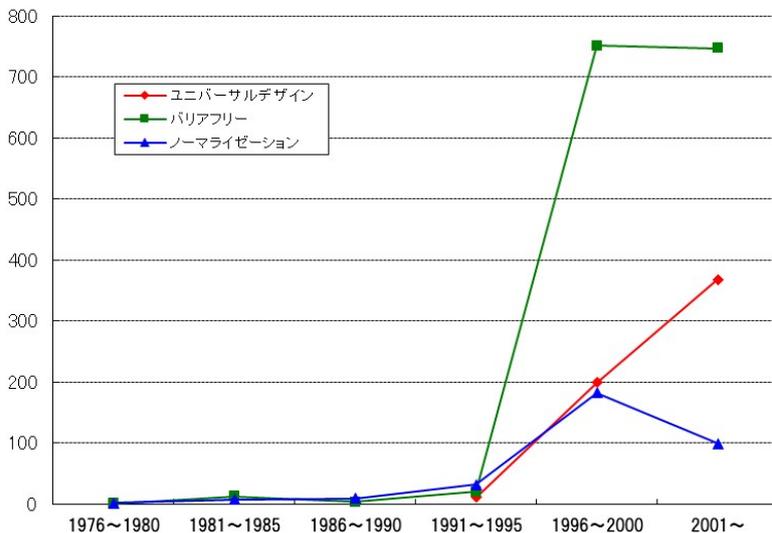


図4 雑誌記事論文数の推移(国会図書館)

新聞記事件数の推移と同様に、ユニバーサルデザインの件数が増える1995～2000年を境に、ノーマライゼーションの記事件数が減少する。

ここで、2つの概念には、何らかの代替可能な要素が含まれているのではないかと仮定した。

3-5 『現代用語の基礎知識』における広がり

ユニバーサルデザインとノーマライゼーションの現代日本社会での浸透や広がりの様子を調べるため、『現代用語の基礎知識（自由国民社）⁽⁴⁾』を用いて調査した。

(1) ノーマライゼーション

ノーマライゼーションの特徴として、1981年から2004年度版までに24年間掲載され続けている①息の長い言葉であること、②社会福祉分野に限定された言葉であること、③関連語が派生しにくい言葉であることがわかった。また、1982年～1986年までの「外来語・略語」コーナーでの説明には「正常化」とだけ記載されており、④正確な意味がわかりにくい(誤解が生じやすい)言葉であることもわかった。

(2) ユニバーサルデザイン

ユニバーサルデザインは、1997年から2003年度版までの間に、毎年平均掲載件数がノーマライゼーションやバリアフリーと比較して最も多くなっている。①注目度が高いこと、②広く利用されていること、がわかる。

また、最近では「ユニバーサルファッション」など、ユニバーサルデザインから発生した派生語も現われ始めている。デザインという言葉の限定的なイメージを避けるため、または表記における文字数の多さを避けるため、今後はユニバーサルデザインに代わって、「ユニバーサル化」「ユニバーサル社会^⑤」などと表現されることが多くなるかもしれない。

4 インタビュー調査

4-1 調査概要

文献による調査結果をさらに詳しく検証するため、2つの概念に関して活躍をしている人々にインタビュー調査を行った。

(1) 調査目的

様々な立場で、ユニバーサルデザインやノーマライゼーションに関わる活動をしている人や概念を提唱(推進)している人から、それぞれの概念に関して思っていることや感じていることなどを伺うことで、日本における2つの概念の意味や役割を検証し、それぞれの相違点・共通点を明らかにすることを目的とした。

(2) 調査期間

2003年10月から12月

(3) 調査対象

各分野において、ユニバーサルデザインやノーマライゼーションに関わる活動をしている人、その概念を提唱(推進)している人(27人)。

(4) 調査方法

インタビュー調査(面接・電話)、質問紙調査

具体的には、電話による半構造化インタビュー面接を想定した質問項目を質問紙にまとめ、それを依頼状と共に対象者に送付し(メールか郵送で)、回答方法として都合のよいものを次の①～③の中から選択していただいた。

- ① 質問紙に直接記入して回答
- ② 質問項目に沿って電話によるインタビューを実施して回答
- ③ 直接面接を実施して回答

なお、実際の回答者27人の主な回答方法の内訳は、①書面19人(70%)、②電話インタビュー4人(15%)、③面接インタビュー4人(15%)であった。

(5) 調査の限界

限られた時間、限られた範囲での調査であるため、本調査の回答者以外にも、多数の方々がこの概念

に関わる活動をしている。また、対象者が、文献、新聞、雑誌等に現れる多忙な人々であったため、(4)の通り、回答方法に幅を持たせることとしたため、結果として、調査方法にばらつきが生じた。したがって、分析については、このことを踏まえて行った。

4-4 調査結果

調査に協力していただいた方々は表1の通りである。調査結果は、5にまとめて記す。

表1 調査回答者一覧(計27人)

氏名	所属	役職	回答方法	公表	分類	回答記号
五十嵐重雄	経済産業省生活産業局人間生活システム企画室	課長補佐	書面	可	行政	A
一番ヶ瀬康子	長崎純心大学 日本福祉文化学会	名誉教授 会長	電話	可	大学	a
江草安彦	川崎医療福祉大学	名誉学長	電話	可	大学	b
大熊由紀子	大阪大学大学院 元朝日新聞社	教授 論説委員	面接/書面	可	マスコミ	c
河幹夫	内閣府大臣官房	審議官	書面	可	行政	d
川内美彦	一級建築士事務所アクセスプロジェクト	代表	書面	可	コンサル	C
小池将文	川崎医療福祉大学医療福祉学科 元総理府1995年「障害白書」筆者	教授	書面	可	大学	e
河野秀忠	そよ風のように街に出よう編集部	編集長	書面	可	NPO	f
梶本久夫	ユニバーサルデザイン・コンソーシアム	代表理事	書面	可	マスコミ	B
古瀬敏	静岡文化芸術大学 元建設省建築研究所	教授 研究部長	書面	可	大学	D
後藤芳一	経済産業省産業技術環境局標準課	課長	電話	可	行政	E
坂本由紀子	厚生労働省職業能力開発局 元静岡県	局長 副知事	書面	可	行政	F
白石正明	(有)国際プロダクティブ・エイジング研究所 NPO ユニバーサル社会工学研究会	代表取締役 理事長	書面	可	NPO	G
非公開	非公開	事務局	書面	否	NPO	H
炭谷茂	環境省 元厚生省社会援護局	事務次官 局長	書面	可	行政	g
高嶋健夫	(財)共用品推進機構 元日本経済新聞社・日経BP社など	機関紙インクル編集長・編集長	書面	可	マスコミ	I
竹川智子	(株)プロモーション・コンサルティングファーム	取締役	書面	可	コンサル	J
多田哲哉	トヨタ自動車(株)第2トヨタセンター	チーフエンジニア	電話	可	メーカー	K
田中直人	摂南大学工学部建築学科	教授	面接	可	大学	L
千葉忠夫	バンクミケルセン財団(在デンマーク)	理事	面接	可	NPO	h
芳賀優子	ヤマト福祉財団 ヤマト運輸(株) 人事部社員福祉センター		電話/書面	可	企業	i
長谷川美香	(有)ミカユニバーサルデザイン・オフィス	取締役社長	書面	可	コンサル	M
細山雅一	松下電器産(株)パナソニックデザイン社	副参事	書面	可	メーカー	N
非公開	非公開	研究員	書面	否	研究所	O
森山幹夫	厚生省四国厚生支局 元厚生省社会援護局	支局長 課長	書面	可	行政	j
柳田宏治	三洋電機(株) (株)三洋デザインセンター	ディレクター	面接/書面	可	メーカー	P
依田晶男	内閣府(障害者施策担当)	参事官	書面	可	行政	k

(敬称略:氏名の五十音順)

5 考察

5-1 日本社会における役割と意味

それぞれの観点から、2つの概念について考察した結果を、表2~7に示す。

表 2 定義

ユニバーサルデザイン	ノーマライゼーション
<p>【広い定義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 社会のさまざまな課題(ハード・ソフト・サービス)を総合的(計画・構築・運用を利用者の視点で)な視点で具体的に解決するシステム ● 人間とは、生活とは、を理解すること ● 仲間はずれを無くすこと ● 誰もが社会参加できる環境や機会の創出 ● できる限りすべての人に利用可能なように製品・環境等をデザインすること。ハード的なもの(製品、建物など)だけでなく、ソフト的なもの(制度、考え方など)もデザインの対象。 ● 多様な利用者の声を発見し、モノ、サービス、社会システム等に反映していく永続的な取組み(情報公開や合意形成、様々な既存の価値観の見直しが含まれる) <p>【設計思想として】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「すべての人のための」良いデザイン ● 障害の有無、年齢、性などの違いにかかわらず、すべての人にやさしく、誰にとっても使いやすいものであることを考えたデザイン ● 一人一人が欲しいもの(やサービス)を、全ての人に提供すること ● 製品・環境等をデザインした「結果」ではなく、デザインする「過程」 ● できるかぎり幅広く多様なユーザにとって使いやすい、利用しやすいデザイン。特定のユーザを排除しないデザイン、の考え方と実践。 	<p>【広い定義】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● どんな人でも当たり前の生活をする権利があるという思想 ● 人間は、どんなに障害や病気が重くても、年をとっても、死が間近に迫っても、「普通(ノーマル)に」暮らす「権利」がある。社会はその権利を実現する「責任」がある ● 普通化・普遍化 ● ヒューマニゼーション ● 人間としての平等思想 ● 障害のある人もない人もお年寄りも若い人も、ともに居ること <p>【障害者・高齢者を対象】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 障害のない他の人と同様に地域での普通の生活を障害者や高齢者に保障すること(処遇の原理) ● 障害者や高齢者や貧困者など社会的な弱者の生活条件を、そうではない人の生活条件に可能な限り近づけること ● 障害のある人たちも障害のない人たちと同じように、「社会の一員として参加できる社会」が、本来あるべきノーマルな(正常な)社会である、という考え方 ● 障害のある方を特別視するのではなく、一般社会の中で普通の生活が送れるような条件を整えるべきであり、共に生きる社会こそノーマルな社会であるとの考え方

表 3 ユニバーサルデザインとノーマライゼーションの共通点

<ul style="list-style-type: none"> ● 今となっては重なる部分が多い、同じような考え方であること(不可分) ● 特別な存在として考えないこと ● すべての人の「自立と共生」をめざす思想であること ● 「当たり前」ということ ● 少数派の人に必要な考え方であること ● 目指す社会観・社会の姿・ベクトル(方向性)は一緒 ● 同じ人間だという発想が基点にあること、どちらも権利意識から発生していること ● さまざまな人が一緒に生活しやすくなることを目指していること ● 「普通」や「普遍化」という意味は同じである ● 「可能な限り」をめざす思想であること ● 障害者(マイノリティ)に関わる問題を、社会的に解決しようという姿勢

表4 ユニバーサルデザインとノーマライゼーションそれぞれの特徴・相違点

	ユニバーサルデザイン		ノーマライゼーション
1	手段	⇔	社会目標
2	全体のため	⇔	グループのため
3	人権概念が薄い	⇔	人権概念と強い結びつき
4	あらゆる分野の再設計(全分野)	⇔	障害者に対するサービスの見直し(福祉)
5	みんなが公平というビジョンを前提	⇔	普通じゃないという現状こそが前提
6	高齢者対象	⇔	障害者対象
7	ゼロをプラスに、積極的	⇔	マイナスからゼロに、ネガティブなものをリセット
8	「健常者」もメリットがある	⇔	健常者にとって直接的なメリットはあまりない
9	経済至上主義(米国)	⇔	社会民主主義(北欧)
10	機会平等(米国)	⇔	結果平等(北欧)
11	実践・方法論的	⇔	思想・概念的
12	戦略・戦術	⇔	社会のあり方
13	「すること」	⇔	「であること」
14	多様な人々が存在することを前提	⇔	ノーマルとアブノーマルを前提
15	自分のため	⇔	マイノリティ(アブノーマル)な人のため
16	普遍性と個別性	⇔	普遍性と平等性
17	ものづくりの基本	⇔	福祉施策の基本
18	協働・参画のプロセス	⇔	結果
19	広がりがある	⇔	柔軟性に欠ける
20	「デザイン」が薄っぺらい言葉	⇔	「ノーマル」の定義が難しい

表5 ユニバーサルデザインとノーマライゼーションの関係性

<ul style="list-style-type: none"> ● 「ユニバーサル社会」と「ノーマライゼーション」を比べるべき ● 背景理念が違う、アプローチに若干の差 ● NZ の考え方の土台の上に UD が深化 ● 基点が違う ● ユニバーサルデザインの根っ子にノーマライゼーションの思考がある ● ユニバーサルデザインはノーマライゼーションを実現するためのハード・ソフトの世界的スケール

表6 ユニバーサルデザインやノーマライゼーションの社会的役割

ユニバーサルデザイン	ノーマライゼーション
<ul style="list-style-type: none"> ● 社会変革 ● 目標と価値観の共有のため ● 新しい付加価値 ● 量から質への変換 ● 本質の問い直し ● 既存の枠組みからの脱出 ● 福祉の市場経済化のため ● 生活者(利用者)中心社会への移行のため ● ビジネスチャンス ● 多様性を認める ● 専用から選択肢へ ● 自分たちのため ● 高齢社会を生き抜く ● 世界を視野に 	<ul style="list-style-type: none"> ● 福祉の基本 ● 社会変革の思想 ● 自立・自己決定・自己実現のため ● 目標と価値観の共有のため ● 多様の受け入れ ● 当たり前のこと

表7 ユニバーサルデザインとノーマライゼーションの課題(欠点)

ユニバーサルデザイン	ノーマライゼーション
<ul style="list-style-type: none"> ● 言葉先行・ブーム的印象 ● まだ過渡期 ● 経済・戦略としての有効性 ● マーケット偏重を懸念 ● バリアフリーと混同 ● 日本では、本来の意味が理解されにくい ● 目的が後回しになり言葉の定義や理解が先になるという逆転現象がおきている ● もっと多くの分野・人に広げたい ● 広い視野で日本型 UD を ● 議論しながら高めていく ● 依然としてネガティブ・お恵みの印象 ● 対象者に偏り 	<ul style="list-style-type: none"> ● ノーマルの定義が難しい ● スローガンの・結果がない ● 毒気がなくなっている ● 具体的な法律などが必要 ● 肩の力を抜いて使おう ● ノーマルの反対語がアブノーマルであることが著しく悪い印象 ● キャッチコピーとしてはわかりにくい ● 負の遺産(福祉やマイノリティを対象とするイメージ)を引きずった概念

5-2 社会的発展プロセス

フラインは、ある新しい原理や思想が概念化 (conceptualization) された時のその概念の社会的発展プロセスを、①概念化→②初期の受け入れ→③立法化→④資源の再配置→⑤広範囲な実験→⑥社会制度化、という循環図式で説明しているが⁽⁶⁾、この図式を、日本におけるユニバーサルデザインとノーマライゼーションの発展プロセスにあてはめると、概ね次の仮説が考えられる。

(1) ノーマライゼーション

概念化(①)は、1970年代に中園氏、江草氏、一番ヶ瀬氏らの研究者や知的障害者の親やその関係者によって議論され研究されながら進められた段階、初期の受け入れ(②)は、1980年代の国際障害者年を契機に、一般の人が目にする白書や新聞や文献などに掲載されながら進められた段階、立法化(③)は1990年代の福祉8法の改正、1995年の障害者プランーノーマライゼーション7か年戦略や2000年の介護保険法の制定などによって行われた段階、そして現在は、④、⑤の実践の段階に入ってきていると考えることができる。つまり、①→②→③という理論の上での発展がほぼ完了しつつあり、現在は④→⑤→⑥の実践の段階に入っていると言える。

(2) ユニバーサルデザイン

概念化(①)は、1990年代に古瀬氏や田中氏などの研究者による研究や川内氏や柳田氏などの実践家によって行われ、初期の受け入れ(②)は、1990年代中頃から、共用品推進機構などを通して様々な人に伝えられ、立法化(③)は、2001年の交通バリアフリー法などによって行われ、さらに、資源の再配置(④)、広範囲な実験(⑤)、社会制度化(⑥)についても、企業によるユニバーサルデザイン商品の開発や販売、行政によるユニバーサルデザイン施策の展開などにより、1990年代後半から始まっていると考えることができる。

つまり、「試行錯誤しながら実践する」状況にあり、新しい概念の概念化、理論化が完了しないまま、実践の段階に同時に入っていると考えられる。

そのことが意味することとして、次に掲げるような仮説も考えられるが、輸入されて間もない概念であるため、現段階での分析では不十分であり、今後の動向を見守る必要がある。

(あ) フラインが示唆した社会的発展プロセス通りに進む思想ばかりでなく、変則的に進むケースもあり、ユニバーサルデザインはその一つである。

(い) ユニバーサルデザインは真の社会変革の思想としてではなく、単なる流行語やブームとして日本社会に浸透している。

5-3 分野的考察

(1) ユニバーサルデザイン

ユニバーサルデザインは、経済分野をはじめ様々な分野で用いられており、日本社会で広く受け入れられやすい要素がある。しかし、経済戦略としての要素が強すぎる部分もあり、本来の目的や方向と離れた方向に向かう、または、経済的なメリットのみが重視され、本来の目的が軽視される可能性もある。また、その発祥した分野が、ものづくりや建築などハードなものの設計思想という印象が強いことや、デザインという日本語のもつ意匠としての意味合いが強いことから、ものづくりの基本、設計思想としてのみ用いられていく可能性もある。

他方で、「ユニバーサル社会」「ユニバーサル化」などと表現を変えて、より広い分野で目標や理念として用いられていくことも考えられる。

(2) ノーマライゼーション

ノーマライゼーションは、福祉から発祥した概念であるという印象を残しながらも、多くの分野に広がっている。しかし、経済分野では使われないことが、現代の日本に社会においては、マイナスとなる可能性がある。日本は経済が優先される社会であるからである。その一方で、日本には、経済に絡むのは下等で、経済（金勘定）に絡まないものが上等であるとの考え方もあり、そういう意味では、長所であるとも考えることもできる。

また、福祉の基本概念として根付いてきた歴史から、人々の持つイメージが福祉と重なる概念であることは、「福祉嫌い」の日本社会における短所となることも考えられる。

6 おわりに

本研究では、ユニバーサルデザインとノーマライゼーションを様々な角度から考察することを試みた。具体的には、これらの概念が輸入され、日本社会に定着する過程を探り、日本社会における役割や意味、違いや共通点などについての検証を試みたが、まだまだ実態は掴めていない。

私は、両者とも、単なる言葉ではなく、社会変革の思想であると思う。

スウェーデンを旅した人が、「スウェーデンでは、最近では、ユニバーサリゼーションという言葉を使っているようだ」と教えてくれた。これがどの程度の現実なのかはわからないが、ノーマライゼーション発祥の北欧でのことなので、ノーマライゼーションが発展した先のユニバーサリゼーションなのか、異なる概念として別の用途や分野で用いられているのか、それとも、新鮮味を与えるために新しい表現がされているのか、興味を惹かれるところである。

このような概念・思想は、時代背景や社会状況にあわせて、言葉としては必要に応じて変化・変形しながら、重要なメッセージを伝えていくものなのかもしれない。

ユニバーサルデザインも、ノーマライゼーションも、アクセシブルも、インクルージョンも、福祉も、すべての人が幸せに暮らす社会を実現するためのキーである。

私自身も、それらのめざす社会を実現するために、模索し続けたいと思っている。この研究も、その一部である。

引用参考文献

- 足立直也他 1996 「ノーマライゼーションとバリアフリーの歴史的考察」 足利工業大学研究収録 22 号
- 秋山哲男 2001 都市交通のユニバーサルデザイン—移動しやすいまちづくり、学芸出版社
- 浅野房世、亀山始、三宅洋介 1996 人にやさしい公園づくり—バリアフリーからユニバーサルデザインへ、鹿島出版会
- B.Nirje 1993 The normalization principle 河東田博他訳 ノーマライゼーションの原理、現代書館
- Danish Center for Accessibility 2002-2003 *Form&Function 1, 2, 3*
- E&Cプロジェクト編 1994 バリアフリーの商品開発、日本経済新聞社
- 江草安彦 1982 ノーマライゼーションへの道、全国社会福祉協議会
- E.M.ロジャーズ著 青池慎一、宇野善康訳 1990 イノベーション普及学、産能大学出版部
- ジー・バイ・ケイ 1998~2003 ユニバーサルデザイン、ジーバイケイ
- N.E. Bank-Mikkelsen 著 花村春樹訳著 1994 ノーマライゼーションの父、ミネルヴァ書房
- 波田永実編 2002 自治体政策とユニバーサルデザイン—住民満足度・最大化をめざして、学陽書房
- 平岡公一、平野孝之、副田あけみ編 1999 社会福祉キーワード、有斐閣
- 北海道立太陽の園 伊達市立通勤センター旭寮 1993 施設を出て町に暮らす、ぶどう社
- 船橋邦子 2002 自治体政策とユニバーサルデザイン—住民満足度・最大化をめざして、学陽書房
- 一番ヶ瀬康子 1994 社会福祉著作集第4巻高齢社会と地域福祉、労働旬報社
- 一番ヶ瀬康子 2001 社会福祉概論、誠信書房
- 一番ヶ瀬康子 2002 福祉のこころ、旬報社
- J.I.キッセ、M.B.スペクター著 村上直之、中河信俊、鮎川潤、森俊太訳 社会問題の構築—ラベリング理論を超えて、マルジュ社
- 自由国民社編集部 1977~2003 『現代用語の基礎知識』自由国民社
- 梶本久夫監 2002 ユニバーサルデザインの考え方—建築・都市・プロダクトデザイン、丸善
- 梶本久夫監修 2002 ユニバーサルデザインの考え方—建築・都市・プロダクトデザイン、丸善
- 河東田博 1992 スウェーデンの知的しょうがい者とノーマライゼーション—当事者参加・参画の論理—、現代書館
- 川崎和男 2002 「日本型ユニバーサルデザインを構築するために」 ユニバーサルデザインの考え方—建築・都市・プロダクトデザイン、丸善
- 川内美彦 2001 ユニバーサル・デザイン—バリアフリーへの問いかけ、学芸出版社
- 木原孝久 1995 わかる福祉の発想、ぶどう社
- 木原孝久 2002 福祉の人間学入門、本の泉社
- 機械工業経済研究報告書 2002 混迷するユニバーサルデザインの実態と今後の方向性、機械進行協会
経済研究所 H13-6
- 北岡敏信 2002 ユニバーサルデザイン解体新書、明石書店
- 北野誠一、石田 易司、大熊由紀子、里見賢治編 1999 障害者の機会平等と自立生活—定藤丈弘その福祉の世界、明石書店
- 北岡敏信 2002 ユニバーサルデザイン解体新書、明石書店
- 古瀬敏 1997 バリアフリーの時代、都市文化社選書
- 古瀬敏 1998 デザインの未来—環境・製品・情報のユニバーサルデザイン、都市文化社
- 古瀬敏 1998 ユニバーサルデザインとはなにか—バリアフリーを超えて、都市文化社選書

- 古瀬敏 2001 *建築とユニバーサルデザイン*、オーム社
- 古瀬敏 2002 *ユニバーサルデザインへの挑戦～住宅・まち・高齢社会とユニバーサルデザイン*、ネオ書房
- 古瀬敏 1998 *ユニバーサルデザインとはなにかーバリアフリーを超えて*、都市文化社選書
- 交通エコロジー・モビリティ財団 2001 *究極のバリアフリー駅をめざして*、大成出版社
- 河野正輝、大熊由紀子、北野誠一編 2000 *講座障害をもつ人の人権③*、有斐閣
- 京極高宣監修 1993 *現代福祉学レキシコン第二版*、雄山閣出版
- 共用品推進機構編 2003 *共用品白書*、ぎょうせい
- 長瀬修 1997 用語解説、リハビリテーション研究第 90 号、日本障害者リハビリテーション協会
- 中園康夫 1993 「ノーマライゼーション原理とソーシャル・アクション」 *ソーシャルワーク研究*、相川書房ソーシャルワーク研究所
- ヘレン・スミス/ヒラリー・ブラウン著 中園康夫/小田兼三訳 *ノーマライゼーションの展開～英国における理論と実践～*、学苑社 1994
- 中園康夫 1996 *ノーマライゼーション原理の研究～欧米の理論と実践～*、関東出版社
- 中河信俊、北澤毅、土井孝義編 2001 *社会構築主義のスペクトラム*、ナカニシヤ出版
- 中川聡 2002 *ユニバーサルデザインの教科書*、日経 BP 社
- N.E. Bank-Mikkelsen 著 中園康夫 訳 1978 「ノーマライゼーションの原理」 *四国学院大学論集 (通号 42)*
- N.E. Bank-Mikkelsen 著；中園康夫訳 1978 「ノーマライゼーション(normalization)の原理」、四国学院大学論集、四国学院文化学会
- 日本経済新聞社編 2002 *経済新語辞典*、日本経済新聞社
- 日本造園学会編 1998 *緑空間のユニバーサル・デザイン*、学芸出版社
- 日経 BP 社出版局 2000 *デジタル用語辞典*、日本 BP 社
- ノーマライゼーション・N プランニング 2001 *戦前戦後障害者運動史年表*、関西障害者定期刊行物協会
- ノーマライゼーションの現在シンポ実行委員会 1992 *ノーマライゼーションの現在～当事者決定の論理* 現代書館
- ノーマライゼーション研究会 1992～1998 *ノーマライゼーション研究*
- 大熊由紀子 1985 *女性科学ジャーナリストの眼*、勁草書房
- 大熊由紀子 1990 *寝たきり老人のいる国いない国*、ぶどう社
- 大橋良助 1993 「文化の翻訳可能性」大橋良助編 *文化の翻訳可能性*、人文書院
- 大熊由紀子 1996 *福祉がかわる医療がかわる*、ぶどう社
- 大阪府市町村振興協会 2002 *共同研究報告書 ユニバーサルデザインによるまちづくり*、大阪府市町村新興協会
- 大谷強 1992 「ノーマライゼーション概念の受入れと今後の方向」 *ノーマライゼーション研究 1992 年年報*
- R. Flynn and K. Nitsch 1980 Normalization Accomplishments to Date and Future Priorities, in Flynn and Nitsch, *Normalization, Social Integration and Community Services*, Univ. park press., p363, p364
- 定藤丈弘 1993 *自立生活の思想と展望*、ミネルヴァ書房
- 定藤丈弘・岡本栄一・北野誠一編 1993 *自立生活の思想と展望*、ミネルヴァ書房

- 斉藤弥生、山井和則 1994 スウェーデン発 高齢社会と地方分権—福祉の主役は市町村、ミネルヴァ書房
- 関根千佳 2002 誰でも社会へ—デジタル時代のユニバーサルデザイン、岩波書店
- 社会福祉士受験対策研究会 2002 社会福祉用語事典、ミネルヴァ書房
- 静岡県編 2002 ユニバーサルデザイン入門、ぎょうせい
- 総理府 障害者白書 (平成 11 年度版)
- 杉本章編 2001 戦前戦後障害者運動史年表、関西障害者定期刊行物協会
- 杉本貴代栄 1999 ジェンダーで読む福祉社会、有斐閣選書
- 田島良昭編著 1999 ふつうの場所で、ふつうの暮らしを、ぶどう社
- 竹中ナミ 1998 プロップ・ステーションの挑戦、筑摩書房
- 田中直人 1996 福祉のまちづくりデザイン、学芸出版社
- 田中直人、岩田三千子 1999 サイン環境のユニバーサルデザイン—計画・設計のための 108 の視点、学芸出版社
- 田中直人、見寺貞子 2002 ユニバーサルファッション—だれもが楽しめる装いのデザイン提案、中央法規出版
- 田中直人、保志場国夫 2002 五感を刺激する環境デザイン—デンマークのユニバーサルデザイン事例に学ぶ、彰国社
- 外山義 2001 「建築環境とユニバーサルデザイン」ユニバーサルデザインの考え方—建築・都市・プロダクトデザイン、丸善
- 津田美知子 1999 視覚障害者が街を歩くとき—ケーススタディからみえてくるユニバーサルデザイン、都市文化社
- 牛島 義友 1976 「第 14 回御殿場コロニー・セミナー報告」教育と医学 1976.7、慶應義塾大学出版会
- Uwe Flick 著 小田博志、春日常、山本則子、宮地尚子訳 2002 質的研究入門「人間の科学」ための方法論、春秋社
- Wolf Wolfensberger 著 中園康夫/清水貞夫訳 ノーマライゼーション—社会福祉サービスの本質、学苑社 1982
- 柳田宏治 1997 「アメリカにおけるユニバーサルデザインの概念」、ノーマライゼーション. 17(6) [1997.06]
- 柳田宏治 1997 「アメリカにおけるユニバーサルデザインの概念」 ノーマライゼーション 1997.6
- 柳父章 1982 翻訳語成立事情、岩波新書
- 吉川勝秀編著 2001 市民工学としてのユニバーサルデザイン—土木におけるバリアフリー最前線、理工図書
- ユニバーサリゼーション研究会編 2003 国際福祉 (社会政策) の今日的展開とノーマライゼーション、山崎英則、片上宗二編 2003 教育用語辞典、ミネルヴァ書房

注 記

1) THE PRINCIPLES OF UNIVERSAL DESIGN (Version 2.0 - 4/1/97) : Copyright 1997 NC State University, The Center for Universal Design : Compiled by advocates of universal design, listed in alphabetical order: Bettye Rose Connell, Mike Jones, Ron Mace, Jim Mueller, Abir Mullick, Elaine Ostroff, Jon Sanford, Ed Steinfeld, Molly Story, and Gregg Vanderheiden

- ① Equitable Use
- ① Flexibility in Use
- ① Simple and Intuitive Use
- ① Perceptible Information
- ① Tolerance for Error
- ① Low Physical Effort
- ① Size and Space for Approach and Use

2) (1) ニイリエが1969年に提唱し1993年に再整理した

①。一日①一日のノーマルなリズム②一週間のノーマルなリズム③一年のノーマルなリズム④ライフサイクルにおけるノーマルな経験⑤ノーマルな個人の尊厳と自己決定権⑥その文化におけるノーマルな両性の形態⑦その社会におけるノーマルな経済的水準とそれを得る権利⑧その地域におけるノーマルな環境水準 (河東田 2003)

3) Copyright 1997 NC State University, The Center for Universal Design

4) 『現代用語の基礎知識』1975年～2003年版；自由国民社 毎年1月1日発行（最新の2004年版は見出し項目約20,000、解説項目約35,000収録）

5) 読売新聞2003年元旦特集号（第三部）に「ユニバーサル社会」の特集が掲載された。次に、その記事の一部を抜粋する。

“いま1億2千7百万人が暮らしている日本の平均年齢は42歳。それが2036年には50歳になり、国民の3人に1人が65歳以上という超高齢社会がやってくる。

団塊の世代が10歳代だった1960年、日本の平均年齢は29歳で、社会全体が若さに標準を置いてもさほど不都合はなかった。だが、少子高齢化の波をもろにかぶる21世紀、モノも街も社会のシステムも、新しい姿に変わらざるを得ない。

道路や建物には段差というバリアがある。不自由な手では使いにくい道具も多い。また、国際化を反映して日本に住む外国人も増えている。年齢はもちろん、性別、国籍、障害の有無などに関わらず、誰もがこちよく共生できる「ユニバーサル社会」実現の重要性が増している。”

6) R. Flynn and K. Nitsch, Normalization Accomplishments to Date and Future Priorities, in Flynn and Nitsch, Normalization, Social Integration and Community Services, Univ. park press. 1980, p363, p364

A Study about Universal Design and Normalization: Especially their Roles and Meaning in Japanese Society

Kyoko YOKOTA

(Study of Social Services)

Abstract

There are two concepts of the social reform called “Universal Design” and “Normalization”. Both words are popular in the present days throughout Japanese society.

Therefore, I wrote this paper for the purpose of clarifying the meaning, roles, development processes of these two concepts in Japanese society.

I adopted the method of examining into literature and internet, and moreover, I made the investigation by questionnairing and interview.

Then, I made analysis of results of examinations.

The following is what I found out through my study.

The first, I realized that Universal Design and Normalization are similar in certain respects. For example, both concepts mean of aiming to realize the better world for all the people living together. And they all mean of “Humanization”.

The second, I recognized that Universal Design and Normalization are different in certain respects. For example, the concept of Normalization was born in North Europe in 1959 for the people with physical disabilities, while the concept of Universal Design was born in North America in 1980s. And in Japan, the people who are concerned with welfare (*Fukushi*) have respected the concept of Normalization, while the people who are concerned with industry and economics have respected the concept of Universal Design.

The third, I realized that the concepts of Universal Design and Normalization have many social roles in Japanese society.

Through this study I found out many important points of these two concepts for social changing. Although they were not made in Japan but from the other countries, these concepts are further growing and developing in Japanese culture and society.

I think that the concepts of Universal Design and Normalization are helpful in making “the Society for all” and bring happiness to all the people.

Key words : Universal design, Normalization, welfare, Japanese society, economy